

院生の研究テーマ（2015年7月21日）

・居所不明児童の実態と行政支援システムの検討

私は現在、「居所不明児童の実態と行政支援システムの検討」というテーマに取り組んでいます。厚生労働省の定義によれば、居所不明児童というのは、「定期的に乳幼児健診を受けていない」、「住民票はあるのに学校に通っていない」、「家を訪ねても家族あるいは子どもに会えない」などの事情で、行政が所在を把握できていない18歳未満の子どものことです。このような子どもたちは、虐待やネグレクト（育児放棄）の被害にあっている可能性があります。それにもかかわらず、行政の目から漏れてしまい、社会に見守られていれば助かったはずの子どもは、大人の事情に巻き込まれてセーフティネットの網の目から落ちてしまいます。したがって、私の研究では、まず、居所不明児童問題の現状を確認し、次に居所不明児童問題になった原因を整理し、そのうえで居所不明児童問題の解決策と予防という行政支援システムのあり方について検討したいと考えています。

博士前期課程：劉 洋

・スポーツクライミングにおけるアスリートの身体特性

本研究では、スポーツクライミングにおけるアスリートの身体的な特性、特に形態について調査し、スポーツクライミングにはどのような身体を持つことが望ましいか、また競技力向上のためには身体のどの部分に対して、どのようなトレーニングを処方すべきか明らかにすることを目的としています。スポーツクライミングは2020年東京オリンピックの追加候補競技の8種目の一つとしてノミネートされるなど近年急激に人気が高まっていますが、競技スポーツとしての歴史が浅いため、通常そのスポーツの基礎的研究とされるアスリートの身体に関する研究が非常に少なく、十分に研究されているとはいえません。そのため、本研究はスポーツクライミングをスポーツ科学の一分野として捉える際の基盤となることが予想され、今後のスポーツクライミング研究の推進の基礎として位置付けることができます。

博士前期課程：羽鎌田 直人

・「生活の場」の視点からみる韓国の高齢者施設の展望と課題 - 日本の高齢者施設の展開の考察を通して

高齢者施設は「収容の場」から「生活の場」へと変わっているとよく言われています。私は特別養護老人ホームで働きながら、具体的に「生活の場」とは何だろうかとの疑問をもつことになって、自分の専門分野への理解を深めるため大学院へ進学しました。

日本の高齢者施策や施設に関する研究をしながら、世界でも類を見ない速さで高齢化が進んでいる母国の韓国の高齢者施設の変遷課程が類似性を持っていることが分かり

ました。(韓国：2000年7.2% (高齢化社会)、2018年14% (高齢社会)、2026年20% (超高齢社会) 予測、高齢化社会→超高齢社会 26年/日本：36年)

韓国は2008年から介護保険制度がはじまり、公的サービスとしては短い歴史をもつ高齢者施設に対し「生活の場」という認識が薄いです。日本の高齢者施設の展開の考察を通して、韓国の高齢者施設の現状を分析し、韓国の高齢者施設が高齢者の「生活の場」として位置づくためには、どのような課題があるのかを明らかにすることを目的として研究を進めています。

博士前期課程：呉 英美

・学校運動部指導者における指導意識の形成過程に関する研究

運動部指導者の研究では、勝利至上主義に代表されるような過度な競技志向の問題点が指摘され、その要因として運動部指導者の指導の在り方、指導能力等に関する研究が散見されますが、どのようにして運動部指導者になっていくかという指導者の養成過程に着目した研究は多くありません。学校運動部の指導担当教員の内、保健体育科以外の科目担当教員は、大学の教員養成課程において部活動について学ぶ機会がないままに、現場に入り、運動部活動を指導している現状にあります。このため、保健体育科以外の教員は、自身の運動部での経験等に頼らざるを得ず、その結果、過度に競技志向を求め指導が再生産されているのではないかと考えます。

そこで本研究では、高校バスケットボール部の指導者を対象にインタビュー調査を行い、主に役割論と社会化論に依拠しながら、どのようにして運動部活動の指導者としての指導観、指導に対する態度・意識を形成していくのかについて検討を行います。

博士前期課程：金子 琴美

・大学運動部における補欠部員の社会的アンビバレンス

大学運動部において補欠部員が抱える社会的アンビバレンスについて研究を進めています。ここでいう社会的アンビバレンスとは、「単一の地位における単一の役割の中に相矛盾する規範的期待が組み込まれているような場合」(架場、1981、p26)を指します。補欠部員はチームの勝利のため仲間を応援しなければならない立場である一方、自分がレギュラーになるため仲間を蹴落とさなければならない立場に置かれます。また、監督、レギュラー、他の補欠選手から相矛盾する役割期待を持たれ、どの期待に応えるべきかわからなくなりダブルバインドに陥ってしまうと考えられます。補欠の抱えるアンビバレンスは個人の尊厳が重要視されている近代的自己が抱えるアンビバレンスの典型であると考え、補欠の抱えるアンビバレンスの構造を解き明かすことは自主性を強要され動けなくなってしまう近代的自己特有の問題の解決に繋がるのではないかと考え研究を進めています。

博士前期課程：種谷 大輝

・青少年期のスポーツ競技空間における体罰に関する研究

学校運動部活動における体罰問題は以前から問題視されていますが、いまだに体罰がなくなったとはいえないのが現状です。これまで体罰問題が発生すると指導者の性格や部員との信頼関係といったものが注目されてきましたが、なぜ体罰が発生してしまうのかという点について構造的に検討をされた研究はほとんど見られません。

運動部における体罰問題は、体罰という行為内容そのものから検討すると法学的な視点で、省庁から出される通知や通達との関連から検討すると教育学的な視点で、実際の現場で指導者と部員との関係から検討すると運動部独自の問題という視点で見ることが出来る様々な構造をもつ問題です。

私はこれらの視点から体罰問題に迫ることによって、体罰がいまだに発生させてしまっている構造上の問題を解明することを目的としています。具体的には、運動部で発生した裁判内容の検討、体罰に関する通知や通達の歴史的変遷の検討、指導者と部員への社会調査等を中心に研究を進めています。

博士後期課程：村本 宗太郎